

被災地の冬の暮らはいかならむ

陽の暖かき東京にあて

(今上陛下 御製)

冒頭の和歌は、新年の御製として宮内庁から元旦に発表された五首のうちの一つだ。陛下の東北の方々への思いに触れ、思わず胸が熱くなる。月日の流れるのは早いもので、千年に一度と言われたあの東日本大震災から、今年十一月で早くも丸三年を迎える。昨年八月に陸前高田、気仙沼、歌津、松島など東北の被災地を旅行してきた。二年半が経ったその時でも、瓦礫が高く積まれ、線路は倒壊し、かつて家が立ち並んでいたところには雑草が生い茂っていた。「復興」ということの大変さを肌で感じた旅行であった。しかし、その一方で立ち寄った仮設の復興商店街は地元の方の笑顔と優しさで溢れていた。「命があつただけでも有り難い。下を向いていたら亡くなった方に申し訳ない。」と笑顔で話す方。「お客さんの家の方は大丈夫だったのかい？」とこちらのことを気にかけてくれる優しい方。「震災当時のことで聞きたいことがあつたら聞いてくれな。」と、恐らく思い出すことも辛いであろう体験を気丈に語って下さる方。そんな人々との出会いから、人間の強さを実感した旅行でもあつた。

この大震災は、被災地はもちろんのこと、日本全体に大きな影響を与えることになった。先月の東京都知事選でも細川・小泉という二人の元総理が「原発ゼロ」を掲げて立候補したように、大震災にともなう原発事故が、日本がエネルギーについて今一度考えるきっかけとなったことは間違いない。また、民主党政権下では「コンクリートから人へ」という名の下、公共事業の見直しが大きく行われたわけであるが、その後の自民党政権では、防災・減災を目指す「国土強靱化計画」により、スーパー堤防をはじめとする公共事業が進められることとなった。これもまた、震災がもたらした日本への影響であろう。

そんな震災のもたらした影響の一つに、「利他」という価値観の復活が挙げられる。「利他」とはもともと仏教の言葉で、他者の為に生きることが、最終的に自分の為にもなるというものである。その対極にあるのが「自利」ないしは「利己」で、自分の利益の為に生きるということを指している。

元来日本人は、「利他」という価値観を大切に生きてきた。「かさこじぞう」や「花さかじいさん」といった昔話が語り継がれていることや、「忠臣蔵」が今なお人気があることから、そのことがうかがえる。世の為、人の為に生きることが日本人にとっての美德だったのだ。先の大戦においても国を守るため、家族を守るために多くの方が命を懸けて戦った。様々な見解はあるが、「玉碎」というあの戦い方こそ「利他」の最たるものではないか。

だが、戦後の教育においてこの「利他」という価値観は否定されることとなった。大人たちは「自分を大事にしなさい」「個性を大切にしなさい」「自分の為に生きなさい」と子どもたちに教えた。「利他」から「利己」へと大きく

振れたのである。戦後の一つの大きな変化と言えよう。この「自分を大事に」「自分の為に」という考えが落とし穴であつた。哲学者の内山節氏が指摘するように、人間は自分の未来が分からない以上、何が「自分の為」なのかを判断することは難しい。その結果、分かりやすい指標として「金」というものに固執するようになってしまったのではないかと私は考える。いかにして金を儲けるか、というハウツー本が流行し、若くして財を築いた人物がヒーローとなった。「利己」という価値観に基づいた教育の結果、日本社会は荒廃してしまつた。

そんな日本を変えたのが東日本大震災だつた。多くの方が「被災された方の為に何か手助けをしたい」「被災地の為に何かしたい」という思いを抱き、そして、それぞれが行動を起こした。被災された方たちもまた「利他」であつた。あのような混乱の中で秩序を乱さず、礼節さえも失わなかつたのだ。この様子が海外でも報道され、日本は各国から称賛を受けた。この震災を機に、日本人は改めて気づいたのである。「誰かの為に生きることの大切さ、尊さ、楽しさ」に。

これほどの荒療治でなければ気づくことができなかつたのか、という悔しい思いもある。それでも日本人は気づくことができた。震災後、「利他」の価値観は「絆」という言葉となつて日本中に広がつた。特に、私を含む若い世代は今まで意識することの無かつた「国」を意識し、「自分」だけではなく、もつと大きなものの為に自分の力を使いたい、と意識が変わつてきたようだ。

七十年前、大きく「利己」へと振れた振り子が、もとに戻ろうとしている。それとともに、今日本人は「日本」を見つめ直し、そして「日本人」に戻ろうとしているのではないだろうか。

行事予定

◎四月六日(日) 正午より 光神祭

*光神様の新しいお宮もお頒ちしております。ご希望の方はお問い合わせください。

◎四月二十日(日) 十一時より 交通安全祈願祭

◎五月十一日(日) 正午より 月例祭

*五月の月例祭は、連休の混雑を避けるために第二日曜日に行います。ぜひご参拝ください。

〈御嶽山登拝に関する重要なお知らせ〉

*御嶽山登拝の日程が左記の通り変更になります。

◎七月十八〜二十日 ↓ 七月二十四日(木)〜二十六日(土)

訃報

本年二月十三日に、高橋八重子様が帰幽されました。ここに慎んで哀悼の意を表するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。(行年 八十六歳)